

## バワ建築をめぐる、魅惑のスリランカ紀行

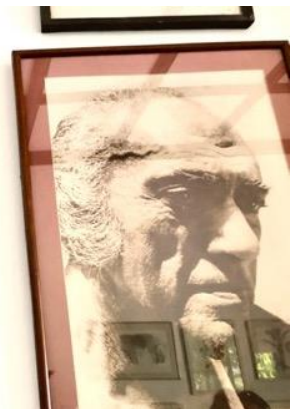
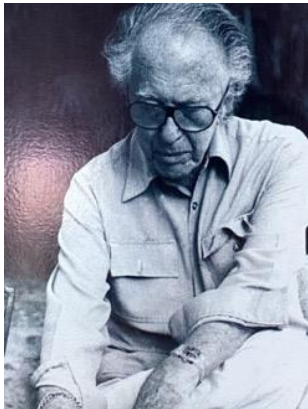
### 1. はじめに

スリランカと聞けば旧セイロン=紅茶、というのが日本人のイメージだろう。「スリランカに行った」というと「えっ、どんな空路で？」との返事が返ってくる。直行便があることが知られていない、これは残念だ。フライトは約 8 時間なのでベトナムの先という感覚で行けて、燃料サーチャージはない。

スリランカに興味を持ったのは長男が「バワ建築」を巡り料理も美味しかった、と聞いたからである。ジェフリー・バワ(Geoffrey Bawa)はインフィニティプールの生みの親で、シンプルかつ静謐な空間を紡ぎ出す。アマングループのトロピカル系リゾートホテルは、バワからインスピレーションを得たとされている。今の南アジアのリゾートホテルの原型とも言える。

バワは 1919 年にスリランカ人の父親とオランダ人の母親の間に生まれ、ロンドンのケンブリッジ大学で法学を修めた。しかし、世界を放浪後、30 代になり建築に興味を持ち、再度ロンドンで建築を学んだ。その後、40 歳代から多くの作品を残した。その見どころを巡る旅である。メジャーな観光スポットにも立ち寄った。

空港に到着してから出発まで 6 泊を、チャーター車(TOYOTA)で、日本語が話せる現地の運転手さんに同道していただいた。本来は運転手さんの役割だが、案内もしていただいた。お値段は普通のツアーより割高に思えるが、観光スポットの入場料やほとんどの食事代が含まれているので割安だ。お値段よりも、とにかく、圧倒的な非日常、安心、感動が待っていた。

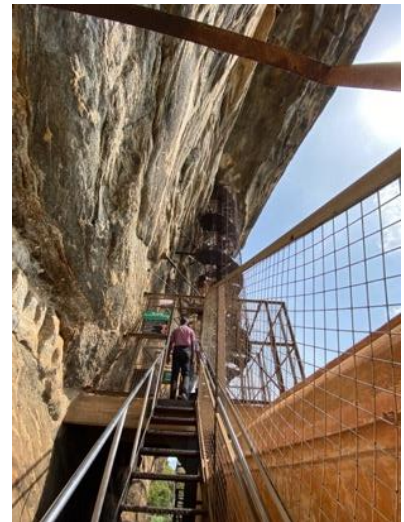


### 2. 世界遺産シギリヤロック

空港近くのホテル(Vivanta Airport Garden)に一泊して、チャーター車でシギリヤに向かった。アジアの街並みの中を、レトロな国産バスや沢山のスリーウィーラー(別名トゥクトゥク)の合間を縫って進む。運転手さんは手慣れたもので、スピードや追い越しには相当気を遣っている。



シギリヤロックには約 4 時間で到着した。高さ 200m ほどのドームで、頂上には宮殿跡が廃墟になっている。エントランスの博物館ではシギリアレディを撮ることができる。最初は平坦で堀のため池もある。垂直に近い岩山を登るには、縦横に移動しながら安全柵のついた通路や階段を登る。登頂すれば、空中に浮かぶ様子がわかる。ラピュタの世界だ。運転手さんも一緒に、解説しながら登っていただけた。



### 3. カンダラマホテル(Heritance Kandalama)

バワ建築の中でも最高峰と言われ、特に日本人に人気のあるホテルだ。1991年、バワ 72歳の作品。ホテルへの道はほとんど林道のように狭いし周囲には人工物は何もみあたらない。4階建てで長さは数百メートル以上ありそうだ。周囲の生態系とシームレスにつながるよう、建設時に出てきた岩をそのまま残したり、成長していく樹木に融け込むように設計されている。周囲の自然と共生している姿が、日本人の心に響く。西洋建築では自然と隔絶した人工空間を造るが、これとは異なるコンセプトだ。



建物の空間配置は、部屋のスペースより圧倒的に余韻スペースが豊富にある。そこにはシンプルな椅子や机が、随所にさりげなく配置されている。デンマークの画家ハンマースホイのような静謐空間。巨大なフクロウは彫刻家ラキ・セナナヤケの作品だ。家具のファブリックはたぶんバーバラ・サソニーの作品で、バワ建築の随所に現れる。



プールは全部で3箇所ある。一つはインフィニティでシギリヤロックが見える。部屋にはジャグジーがあり、窓からシギリヤロックを遠望できる贅沢さだ。目の前の大木では猿が遊んでいたり、鳥の声、蝶の舞に溢れている。常夏なので、植物、動物、昆虫の生命が溢れている。ヨーロッパなら冬は寒く陰鬱だから、強い憧れを抱くに違いない。



#### 4. 世界遺産ダンブツラ石窟寺院

岩山に掘られた複数の石窟寺院が並んでいる。内部に入って度肝を抜かれた。確かに涅槃像は写真で見たことはある。しかし、それがいくつもあって、また、他の仏像もところ狭しと並んでいる。お釈迦さまの顔が時代によって変わっているのも面白い。壁一面の彩色とデザインが斬新だ。



スリランカは小乗仏教（日本は 552 伝来の大乘仏教）なので、戒律はややきびしい。人々はその信仰に篤いという。スリランカの人々は、悩みや迷いが出るとどうすればいいかを、お釈迦さまの教えの基準で考えるそう。運転手さん曰く「そんな時、日本人はどうするんですか？」「まあ適当です」と答えた。

## 5. 仏歯寺

ダンブッラから約3時間で高原都市のキャンディに到着。お釈迦さま（ゴウタマ・シッダルータ）は一生の中で3回スリランカを訪れたほど因縁が深い。当時の方々が亡くなられたお釈迦さまの歯を密かに国に持ち帰り、以来、仏歯寺をスリランカのアイデンティティとして国が手厚く管理している。ひっきりなしに多くの人々が参拝し、生花（ロータス）をお供えされている。

仏歯寺隣の劇場でキャンディアンダンスを鑑賞した。最後の火渡りは火傷しない技が魔法だ。



## 6. キャンディのホテル

この日のホテルは Mahaweli Reach、川沿いにある。バワの作品ではないが、西洋建築の素晴らしいホテル。テラスで食べた朝食もグー。





## 7. ギャラリーカフェ (Paradise Road Gallery Caffe)

キャンディからコロomboに戻り、ギャラリーカフェで昼食を摂った。バワの使っていた調度なども置かれミニ展示場のような雰囲気もある。このレストランの空間構成が素晴らしい。限られたスペースに黒と白をベースにした簡素なデザインで統一され、オブジェや美術品がさりげなく置かれている。





食事は自由で、唯一自腹でのランチであった。食後は、併設されているセンスのいいショップに寄り、つつい手が伸びた。

## 8. ナンバー11 (Number Eleven)

バワがコロomboで過ごしていた家である。30歳台後半に長屋の一角に入居後、次々に隣接する部屋を入手し、全体が一つの作品に仕上がっている。バワの使っていた車、くつろいだ居間、ベッド、調度を、内覧ツアーで案内していただける。バワの吸っていた空気を吸うツアーだ。



この後、バワ作品のシーマ・マラカヤ寺院を見学し、国会議事堂を車窓に見ながら、南部の観光都市ゴールにあるジェットウイングライトハウスに向かった。

## 9. ジェットウイングライトハウス (Jetwing Light House)

ジェットウインググループのリゾートホテルである。1995年、バワが74歳の作品。ここに連泊した。ライトハウスというのはゴールの灯台が所以なのだろうか。ゴールの海岸にあるホテルだが、階数が控えめで横長。カンダラマと同じように、岩をあえて露出させていたり、起伏を利用した内庭のデザインが斬新だ。自然に逆らわない思想だろう。





海辺に面して、椅子やテーブルが整然とセンスよく並んでいる。目の前の岩の海岸では波頭が砕け、耳と目で海を感じる。



バワと共同で作品を仕立てて行った、ラキ・セナナヤケ作の鉄製彫像群(ポルトガルの侵略)が圧巻だ。螺旋階段が続き、天頂には丸穴が空いていて雨も降り込む。その真下は小さな池が配置されている。



4回の食事を楽しんだ、これもいろいろ選べて楽しく、おいしかった。スリランカのカレーは薬膳料理に近いようだ。さまざまな香辛料、野菜、鶏肉、魚を使う。いつの間にか慣れてきて体調もいい。プールは二つあり、一つは中央がかなり深い。大人向けのリゾート高級ホテルには深いプールがあるような気がする。



夕刻の海岸はちょっとした絶景だ。

なお、ジェットウイングというのはスリランカの高級ホテルチェーンで、エコ活動に本気で力を入れている。Sustainability Creating Butterfly Effect を標榜している。世界の片隅の小さな力であっても自らの行動で世界を変えていく、という経営意思を表明している。



## 10. ゴール旧市街 (Galle)

スリランカは16世紀末から約400年間、ポルトガル、オランダ、イギリスの植民地になっていた。その出先の都市がゴールだ。様々な宗教の建物が散在するコンパクトな都市（旧市街）だ。自由時間をいただいて散策した。今回、ゴール観光は適当に済ませて、前後はジェットウイングライトハウスのプールでくつろいだ。



### 11. ルヌガンガ庭園 (Lunuganga Garden)

バワが週末を過ごした別荘で、コロンボから南に車で1-2時間。ルヌガンガとは土地の名前で、開拓・造成しつつ、この庭園に通ったという。

小建築や庵が点在し、今はミニホテルも併設されている。緑と水に囲まれ、アンティークや美術品が多い。つまりバワが愛したものすべてがある。その証拠はバワ自身（樹木葬、2003年84歳）と育ての親の墓（地面に埋めた岩だけ）があることからわかる。（こうすればいいのか、と妙に納得）





バワは女性に興味がなかったようで生涯独身だった。ので？彫像はすべて男性なのかな。庭園でくつろぐバワがメイドを呼ぶには、鐘をたたいた。場所によって鐘の音色が違い、用件によって叩く数を変えていたらしい。

バワの好きな植物はプルメリアだったようだ。園内にはプルメリアの巨木があり、朝食を摂ったというテーブルもプルメリアの押し葉様。



## 12. ベントータ・シナモンホテル (Bentota Cinnamon Hotel : 旧ベントータ・ビーチホテル)

昼食のためにわざわざ立ち寄った。ここはバワが41歳の作品だ。バワも顔負けなのは、色彩豊かなインテリアの配色、これはエナ・デ・シルヴァの作品で南国のあふれる生命の豊かさを表現しているようだ。彼女は、スリランカのファッションに影響を与えた。

レストランは今回で一番豪華だった、というのはメニューのどれを頼んでもよかったから。ほぼ一人前（サラダ、メイン、パスタ）を二人でシェアしてちょうどよい量、パンも絶品だ。



### 13. ブリーフガーデン (Brief Garden)

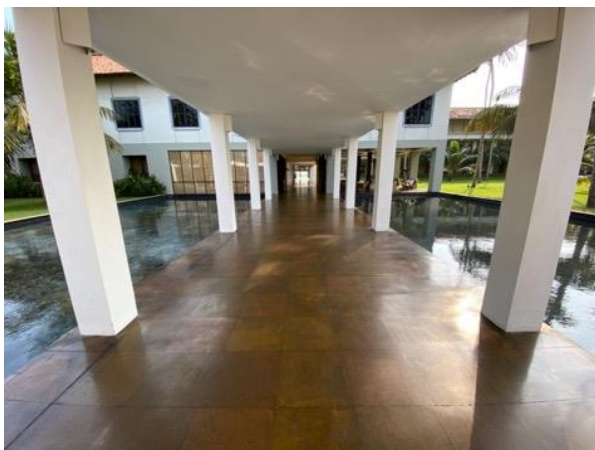
ジェフリー・バワの兄ベヴィス・バワは作庭家であった。ベヴィスが造園したのがブリーフガーデン。兄弟でインスピレーションを交換していたに違いない。自生の植物を利用した自由庭園風、ところどころに姿を現す彫像が渋い。説明を受けた部屋は、バワテイストのシンプルさ。若かりし美青年のバワの写真が目を引く (冒頭写真)。



#### 14. ブルーウォーター (The Blue Water)

1996年、バワが75歳の作品。背の高いヤシの木が海辺に乱立し、大きなプールが広がっている。いかにも南国風で、首都コロンボから近いリゾートホテルなので、欧米人の客が多い。顔立ちが北欧風やイギリス風の方々、それにあるチームはニューヨークから東京、ベトナム経由でここに来たという。

ホテル内のテイストは黒と白を基調にしている。ロビーから部屋に続く回廊が美しい。旅の途中、日本語を話せるスリランカの方に会った(ホテルスタッフ)。スリランカ語は文法が日本語に似ているから上達するらしい。







## 15. アバニ・カルタラ (AVANI Kalutara)

最終日の昼食に立ち寄った海辺のリゾート。バワが 48 歳の 1967 年の作品。今や普通のリゾートホテルだが、当時は革新的であったに違いない。



## 16. おわりに

団体旅行ツアーは、お仕着せとは言わないが、観光スポットを効率よく巡る。しかし、時間制約があって自由行動はできない。今回は、チャーター車と運転手さん付きで、効率よく、わがままにバワ作品を堪能した。行く先々で、バワ、そして交流・協業された方々とのインスピレーションの連鎖を感じた。

バワは建築家というより、インテリア+オブジェ、調度、植生、景色も含めた（つまり人間から見た環境の）全空間設計者である。元々スリランカは元来の自然宗教と仏教に根ざした文化、それに、バワのモダンセンスが融合し、日本人好みの作品が多く生まれたのだろう。バワのセンスの源泉は、異文化の間に生まれ、その生い立ち（両親が早く他界）と、スリランカへの愛情、それらの交差点にあるのかもしれない。

今回（2023年5月）は、本来なら雨季だが運よく雨にも遭わなかった。自称「まかせて晴れ女」を連れていたからに違いない。観光客は少なく、結局、日本人には誰にも会わなかった。

移動経路の途中では、運転手さんをお願いして、（バワの通った）アンティークショップやブルーサファイヤ（スリランカが有名な産地）の見学もできた。コース最後にはスーパーマーケットを案内していただいた。日本人の行動をよく知っておられる。

運転手さんは程よく几帳面かつフレンドリーなだけでなく、ちょっとした私のトラブルも手際よく解決された。それに、臨機応変に、スリランカの歴史、文化、薬草治療など様々なことを紹介していただいた。旅が成功した影なる功労者と言える。旅行会社から聞いていたチップより気持ちだけ多めにお手渡ししたが、事実はその勝る感謝！

おかげさまで、大穴場の海外旅行を発見した気持ちで、一挙にスリランカファンになりました。普通のツアーに飽きた方々がこのレポートを読み、参考になれば幸いです。

by izumi6688